

奨励賞

父を憶う

符津町 野口奈美子

明治生まれの父は貧農の二男で、兄と妹がいて、父親は仙気という患いで早逝し祖母と母との五人暮らしだった。父は幼い妹の手を引き麦藁を工夫して小さな指輪を作り妹の指にそおっと嵌めたそうで、おばさんは亡くなるまで姉や私に話してくれるのだった。

当時の小学校は四年制で、読み書き、算術を学べば家のために働くのが普通でした。

父はどんな仕事に向いているか、小松の魚屋、下駄屋、莫薩屋等へ奉公。呉服屋の丁稚を経験し商いが性に相い利潤も多いと気付く。

小さな布袋に銭を入れ莫薩買いをし、新潟や富山、福井ときめ細かく廻り一角の商人に育ったのでした。その頃の娯楽は村人がこっそりと集う賭博だった。神社の床下での開帳を巡査さんに知られ、サーベルの音に暗闇の中を手探りで逃げ逃げと、囲炉裏の灰を掻きながら面白おかしく話してくれる人でした。

父はあまり大きな人ではなく、徴兵検査で五尺に張られた縄をすうと潜り不合格となり在所には体裁が悪く、遠く北海道の知人を頼り、莫薩や布団、蚊帳を送り未開の地で物々交換の商いに精を出し、アイヌとの取り引きでは、先づ始まりで一ケ十を数えたと終りで一ケと十二ケで十ケとして買ったのでした。

北海道のヘソと呼ばれる旭川を拠点に行商に励み厳寒の地で辛酸を味わった時は古里へ便りを書き、心を取り直し商魂を磨き頑張る姿を富山出身の宿の主人に認められ、美瑛から行儀見習いに来ていた母と、父二十二歳、母十八歳で結婚。明治四十五年に長兄が生まれ、お金も溜まり望郷の念がしきりと湧き、実家の兄に金を送り老母が重病だから一度帰る様にと行って迎えに来て欲しいと便りをし、大芝居を打ったので

した。実家の兄が協力して旭川迄迎えに来たのだった。

母の実家では約束が違う子供を引き取るから離婚しろと迫ったが、母は泣く泣く小松へ。

二間に三間の小さな家で父は懸命に働き、遠出の村では得意の浪曲を唸り商買は白山下や加賀平野まで手を拡げ、昭和九年手取川の大洪水の折は、家中の衣類を持ち上の兄二人を連れ被災地へ走ったのでした。

今と言うボランティアだった。その頃は月賦販売だったが被災地の人々はきちんと払って下さったと夜咄をする父だった。

昭和十年三月十日、陸軍記念日の朝在所で大火があり築二年の家が類焼し、小松にいた兄二人が知人と倉へ泥を塗り消火に当たっているのに、父は葉缶の蓋を懐にうろするばかりだったという。三十戸も焼けた後に佇ち、父は動産は難に弱いと田圃を一町歩買ひ求め家も買ひ、母は農業と家事の間に編み物や縫い物をこなし、越中ぢや立山加賀では白山、駿河の富士山日本一ぢやよ、と家の安泰期。

父が月賦の集金日を知らず葉書を何十枚と達筆で記す姿は厳しく声も掛けられな

かった。

家では葉書や切手を扱い、電球の線の切れたのを交換する仕事もあり賑やかだった。

父は帆布の折り畳み式の財布を肌身放さず持っていた。財布にはお恵比寿様が描かれていたので大切な物だと私は見ていたのだ。

戦争が始まると父は背広やカッターを着て人夫の人を指図する田植えや、稲刈りには案山子の様だと笑われると踊って見せるのだった。

農作業は苦手でしたが本家とは何時も良好な関わりを保ち、母が八十歳で逝った通夜にお仏壇の前で酔いつぶれているのだった。遠く北海道から来て八人の子を成し勞苦を共にした母に、饒の言葉も無く酒に紛らわすしか方法がなかったのだろう。

ユーモアで気転が利き字も絵も上手で、行商の必要から努力して身に着けたのだろう。

八十八歳の祝膳には兄嫁を始め女性ばかり八名を招び、ベッドの上から目を細めていたのが最後の憶い出となったのです。私は八十七歳まで入院の記憶はありません。頑健な身心をありがとう。そして忘れません。

## 四国遍路の人間模様

京町 山本 和子

春三月下旬、「春は名のみ、風の寒さや」と歌のとおり、雪の降った日の数日後、夫と共に四国遍路の旅に出かけることとなった。

四国遍路には、遍路病と称する病がある。一番札所から八十八番札所まで、ようやく廻ってホツとすると同時にまた行きたくなくなるといふ、お医者さんでも治せない病である。

夫はこの病にどつぷりと浸かっている。私は片足ほどか。しかし旅行についていきたい私はすぐに夫に賛同する。

行き方は、富山発電車とバスによるツアーだ。今回は三十六名、富山、石川、福井の「北陸四国遍路御一行様」が肩書きとなった。まずは電車で姫路、その後はバスで明石海峡を渡り徳島にはいる。

こうしたツアーの面白味は、三日間行動を共にすることで皆それぞれ仲良くなり、その人柄、人間模様が次々にわかってくる

ことである。

我々三十六名の他に、バスの運転手、添乗員、先達と呼ばれる、お寺の案内、お参りの仕方、もちろん教えてくださる半お坊さんの存在の人がいる。そうしてもう一人は納経帳、掛け軸、などをお客様から預かり納経帳で朱印の世話をしして運ぶ人、計四名いる。

昼ごろ徳島に到着、一番札所靈山寺を目指す。初めて参加した人が多いため、四国遍路がどういふものかわからない人が大方である。お札たぶに何を書くか、般若心経の意味のようにして唱えるのか。般若心経の意味は

「姿あるものは常に移り変わる。移り変わり、姿を変えるのが、我々が生きる世界の本当のあり方だから、目に移り、感じ、想い、行い、知り得たと思うことに、実体はない。」

「仏の目で見れば、この世は移り変わっているだけだ。」

「移り変わる世界で、自分が目にし、心に思い、行い、知ったと思うことも実は存在しない。苦も、苦の原因も、苦を抑える道も。」

そうした意味を先達さんがまず説明する